



インドの今を象徴する都市

昭和女子大学 金子朝子

コルカタはインドの北東部にある。以前はカルカッタと呼ばれていたが、1999年に植民地以前の名前「コルカタ」に戻った。アジア初のノーベル文学賞受賞者である詩人タゴールが生まれ、マザー・テレサが作った「終末の家」のある都市でもある。約1400万の人口をかかえ、急速に近代化が進んでいる。空港から町に出たとたん、ものすごい車の数と排気ガスの臭いに圧倒される。右左、前後から車が入り混じってひしめき合う。どの車も先を争って走るので、ハラハラのし通しだ。運転手たちは、遊園地にあるマッドマウスさながら、正面から突進してくる車を見事にさっとよける。

「まな板の上の鯉」と思って諦めかけた頃よく見ると、ひしめき合っているのは、車だけではないことに気付く。庶民の生活地域にも残る古いイギリス植民地時代の建物は、骨格だけは今でも頑丈だが、その多くは内装が朽ちてしまっている。路上でその日暮らしをする人もまだ多く、貧富の差も大きい。道端に露天商が所狭しと立ち並び、「湧き出している」としか言いようのないように人々が行き交っている。

もっと驚くのは、そんな雑踏の中を牛が悠然と歩き、道路をふさいでも決して追いやったりはしないことだ。ヒンズー教では牛はシバ神の乗り物、神の使いである。道端に生えているほんのわずかな緑の草を悠々と食べていたりもする。市場に行く大きな荷物を運んだり、荷車に人を乗せたりして人々と共に生活している。土埃にまみれて、商売をしたり、座り込んだり、歩いたりして生活している人たちの中に子供達もたくさんいる。犬も、猫も、鳩も、鶏も



いる。この地域だけを見ていると、動物と人間の区別すら無いようにも思える。

日本と何が違うのか考えてみた。ここに生活する人たちには、ほんのわずかな食べ物や草でも、食べられれば根こそぎ食べる、車が通ろうと人が歩こうと、場所があればどこでも寝るといふ、「生きる」エネルギーが満ち溢れている。日本の若者からは、何が何でもやり抜くぞという活力や熱気が最近伝わってこない。安全で、清潔で、おとなしくしていれば無事に人生が終るような、そんな温室にも似た日本の環境の中で、人間が本来持っているパワーはどこで発散したら良いのだろう。

広いインドのたった一つの都市コルカタの一面を見ただけで、インドは到底語れない。より深くコルカタを知り、インドの魅力をもっと探りたいものだと益々興味が湧いて来る。

表紙写真について

「オーストラリア人」

星美学園中学高等学校 田嶋 美砂子

オーストラリアの大学の新年度は通常、2月末に始まる。その数週間前からオリエンテーションが実施され、新入生は大学生活に関するさまざまな説明を受ける。この期間のキャンパスには写真のようなヘルプデスクが設けられ、教職員のみならず、有志の在校生も多数、サポートにあたる。

新入生の中には留学生も多い。90年代半ばに「高等教育の国際化」という名の下、大学などの教育機関が留学生の受け入れを大幅に拡大したことに起因する。それから10余年、留学生側もさまざまな変貌を遂げた。最大の変化はpermanent residency visa（永住査証、通称PR）の獲得を最終目的とする学生が増加したことであろう。

PRは国民の持つcitizenship（市民権）とほぼ同等の権利が約束される。そのため、出身国と比較し、オーストラリアの方がよりよく生きられると判断した人々の間で人気が高い。しかし、その獲得には通常、この国の教育機関で2年以上、学ばなければならない。興味深いのは、オーストラリアで人材が不足している職業（例えば、医師、看護師、エンジニア、会計士など）に直結する学問を専攻すると、PR獲得に必要なポイントが高くなる点である。その他にも年齢や英語力、実務経験などがポイントを左右する。

人口が2千万人程度のオーストラリアにとって、高度な技術や専門知識を有し、この国の発展に貢献することのできる若い人材は貴重である。このような背景と留学生側の希望が合致し、今日のオーストラリアが形成されている。

PRの獲得から数年が経過すると、今度はcitizenshipを得る機会が生まれる。citizenshipの保有者は選挙権が与えられ、海外渡航の際にはオーストラリアのパスポートを使用することになる。「オーストラリア人」の誕生である。

数年前に「オーストラリア人」となった友人から話を聞いた。citizenshipの取得には管轄する省による簡単な（彼曰く、形式的な）面接があり、「あなたはよきオーストラリア人になれますか」などの質問を受けるそうだ。彼も問われ、「はい」と答えたが、その面接官が「オーストラリア人」の多くを占めるアングロ系ではなかったため、逆に尋ねたところ、彼女自身も移民であることがわかったという。

後天的に「オーストラリア人」となった移民が「あなたはよきオーストラリア人になれますか」と問う職業に就く。毎年、約10万人もの人々が新たにcitizenshipを取得しているこの国の現状を考えると、珍しいことではないのかも知れない。PRやcitizenshipにまつわる問題が皆無とは言わないが（また、先住民の存在も忘れてはならないが）、懐の深さを感じる話である。同時に、私の中には別の問いが生じる。「日本人」とは一体、誰のことであろうか、と。（表紙写真も筆者による）